研究ノート

ジーン・リース再考
――ヴィクトリア朝の「遺産」と脱植民地化のインパクト――

堀内　真由美

ポストコロニアリズムとヴィクトリア朝研究

世界の主要国による植民地支配が公式に終了する 1970 年代以降、過去の支配のありようを外交・軍事・経済面だけでなく思想・文化を通して検証するポストコロニアルの議論が、かつての支配国、被支配国双方から続けられている。本橋哲也がいうように、ポストコロニアリズムとは「コロニアリズムの終わることなき再検証である」。[1]

イギリス史におけるポストコロニアル研究としては、1980 年代後半以降、イギリス性 (Britishness) の創造、普及、受容の過程をとおして、本国人と植民地人との関係性を明らかにしようとする試みが継続中である。[2] とりわけヴィクトリア時代の「人種」と階層という支配構造を支えた「帝国としてのイギリス性」に注目が集まる。最近では、アン・S・ラッシュが、帝国版図の拡大が最盛期を迎える 1900 年から 1960 年代の植民地独立期にかけて、ヴィクトリア朝におけるイギリス性が教育やメディアを通じ、西インド植民地生まれのエリート層にどう受容され独立期にどう利用されたかを明らかにした。[3]

一方、ピーター・ヒュームの『征服の修辞学』では、歴史だけでなく文学を題材としたポストコロニアル研究の重要性が示される。[4] とくにヒュームが主張するのは、影響力を持つ文学作品の価値を植民地主義との関係で再考することである。『テンペスト』や『ロビンソン・クルーソー』といった作品に、イギリス人とカリブ海先住民との接触が生々しく描かれていることを、当時の歴史状況を参照しながら明らかにするとともに、ヴィ

クトリア時代に完成する「帝国としてのイギリス性」の源流を私たちに提示してくれる。

本稿の目的は、歴史と文学におけるポストコロニアル研究の蓄積に学び、ヴィクトリア朝の文化的「遺産」が、植民地生まれのイギリス系白人にどのような影響を与えたのかを明らかにすることにある。その際ヒュームのいう「影響力を持つ文学作品」として、本稿では、ヴィクトリア期の作家シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』(1847) を取り上げるとともに、[5] それを下敷きした、英領ドミニカ島出身のジーン・リース（1890–1974）による『広い藻の海』（1966 年刊行、以下『藻の海』と記す）を中心に考察する。[6]

ブロンテ姉妹の小説を再構成した作品は多数あるが [7]、『ジェイン・エア』に関しても戯曲や映画を含め多様な作品が世に出ている。そのなかでも『藻の海』については、人種的に否定され沈黙させられた者や男性支配の下で力を奪われた女性に、自ら語る声を与えたいとする作家たちが、ポストコロニアルやフェミニズムの視点から書き直すきっかけとなった画期的な再構成作品だと評価する声は多い。[8]『藻の海』は独立した作品としても幅広く論じられてきた。作品に現れるリースの人種観や女性観をはじめ、奴隷主を先祖に持つという個人史が作品に与えた影響など多岐にわたる。私的体験を作品に投影させることでも知られるリースの特徴は、キャロル・アンジェールの『ジーン・リース生涯と作品』が示してくれる。[9] リースの出生から死までに起こった出来事のどれがどの作品に投影されているかを、創作メモや自叙伝、書簡のほか、家族、親族、友人たちへの聞き取りなど膨大な資料を丹念に突合せ、文字通りリースの生涯と作品に迫っている。

リース再考の意義と目的

全生涯と作品を通して考察されてきたジーン・リースの、ある時期つまり「リース年表」に必ず記載される「1936 年ドミニカ島への短い帰郷」の時期に関して、これまでの研究から詳細をつかむことは難しかった。後述のように、この帰郷でリースは、故郷が植民地の自治・独立を求める新

しい時代に入ったことを知る。ところが、脱植民地へと向かう時代を念頭に置くはずの、ポストコロニアル・フェミニズム批評[10]やクリオール化論[11]でも、「奴隷主の子孫」というリースのルーツを前提に、19世紀コロニアリズムへの着目から一足飛びに西インドのポストコロニアルの現状が語られ、両者の間にある脱植民地化への時代とリースとの関係性は、ほとんど注目されずにきた。

理由の一つとして、西インドの文化的事情があるだろう。脱植民地化が本格化する1950年代から独立が完了する70年代にかけて、西インド植民地で政治的再編成と並行してあった文化的再編成の動きである。この動きは、植民地生まれの白人を通して維持されてきた宗主国文化の否定を余儀なくさせた。バルバドス出身の詩人エドワード・K・ブラスウェイトは、74年に著した西インド文化論のなかで、独立が未完了ななかアフリカ起源の文化の重要性を強調しなければならない時代に、なぜ本国系白人の「文化的貢献」を評価する必要があるのかと苛立ちを表している。『藻の海』にも手厳しい。作中、イングランドの屋敷に監禁されているヒロインでジャマイカ生まれのクリオールが、かつて故郷でともに遊んだ黒人少女に夢の中で再会し、彼女の求めに応じ水面に向かって飛び込む場面を、「白人女性と黒人女性の和解の象徴」とするポストコロニアル・フェミニズムの解釈に対し、二人が友人だったことは一度もなく、リースがヒロインにそう思わせたかったとしても、黒人少女は歴史的にヒロインから切り離されていたと批判した。[12]

リースと作品を評するには、「人種」が強力な経済的・社会的カテゴリーではなくなるまで、そこから目を離すことは不誠実だという認識が要ると、カリブ海文学の専門家エレイン・サヴォリはブラスウェイトへの共感を示す。[13]脱植民地化の時代が被支配者たちにとって、ヴィクトリア朝支配文化に代わる「我々の文化」創造との新たな苦闘を意味したからである。そうであれば、安易に「脱植民地化のインパクト」をリースのなかに見ようとする行為ははばかられるかもしれない。しかし、そうであるからこそ、支配者側に属する白人クリオールであるリースにとって[14]、脱植民地化に向かおうとする故郷との遭遇はどのような意味を持ち、どのような結果をもたらしたのかを考察することは、ヴィクトリア朝文化の「遺産」

が与えた影響を示す「もう一つの事例」となろう。

『藻の海』では、1834 年の奴隷制廃止以降も続く西インド植民地体制下で、主人公のクリオール女性が「人種」と階層という強固な本国の支配構造と、島内に進行していた白人支配の弱体化との間で自己認識を動揺させられる。奴隷制と植民地支配の「歴史」という主題のほかに、本稿では、脱植民地化とリースの関係にも着目して考察を進め、彼女が遭遇した「もう一つの歴史」が『藻の海』に投影されていることを明らかにしていく。故郷の「現在の姿」がリースに与えた影響は、従来の作品解釈に新しい視角を提供するとともに、ヴィクトリア朝の「遺産」への認識を改めて示すことにもなろう。

家族史と「二等市民」としての本国体験

『藻の海』を構成する「二つの歴史」のうち、奴隷制と植民地支配の歴史描写には、リースの家族史と彼女の生い立ちが投影されている。人物の設定には家族史が、主人公が本国や本国人に抱く感情は、17 歳から 10 年あまりの本国体験が下敷きとなっている。

ドミニカ島は、カリブ海小アンティル列島の南半分に連なる小島である。[15] 島の領有は七年戦争（1756–63）で一応の決着がつくまで英仏間で揺れ動いた。そのさなか白人入植者が 1691 年に開拓したのが後にジュネーヴ農園と呼ばれる地所である。最大規模 1550 エーカーで島第二位の広さを誇った農園の管理人として、18 世紀末スコットランドからやって来たのがジェームズ・ロックハート、リース母方の曽祖父である。彼は 1824 年にジュネーヴ農園を買い取り、島でも突出して多い 258 人もの奴隷を所有する。プランターの「行ない」の例にもれず、多くの「肌の色の異なる」婚外子を残した。

奴隷制廃止から 3 年後にジェームズが亡くなり、さらに 1844 年、奴隷制が復活するとの噂が広まり各地で暴動が頻発すると、ジュネーヴ農園も襲撃目標となり、同年農園と屋敷は元奴隷たちに焼き討ちにされる。その後ジェームズの子どもたちが屋敷の再建と農園維持に奮闘した。81 年、一人の若者がウェールズからやって来る。農園に近接する地域に医務官と

して赴任してきたウィリアム・リース・ウィリアムズは、長兄を優先する父との折り合いが悪く故郷を出た。赴任まもなく熱病にかかった彼を農園の双子姉妹が看病する。ウィリアムは翌年、双子の一人ミンナ・ロックハートと結婚し5人の子どもをもうける。ジーン・リース、本名エラ・グェンドレン・リース・ウィリアムズは1890年8月24日、首都ロゾーで夫妻の次女として生まれた。

12歳のとき、黒人信徒たちが、カトリック教会を批判した記者宅を取り囲む様子を間近に感じたリースは、「黒人への警戒心のようなものが心に忍び込んだ」と振り返る。この体験と、1844年にジュネーヴ農園が焼かれた事件が、『藻の海』の焼き討ち場面のモチーフだとされてきた。[16] しかし後述のように「焼き討ち事件」はもう一つある。その事件までの間にリースは苦い本国体験をする。

リースは1907年8月故郷を離れケンブリッジの名門女学校に編入する。女教師たちは優秀な「ケンブリッジ・ウーマン」だったが、厳しい授業や「ヴィクトリアン・マナー」を重んじる寮生活は苦痛でしかなく、それが理解できない女教師たちに心を開けなかった。進学を断念し女優を志願したリースは、俳優養成学校に合格するが半年で辞めている。自叙伝では父の急死で退学したことになっているが、[17] 本当の原因は「英語」だった。当時の俳優たちに求められた「キングズ・イングリッシュ」は、幼い頃から「なまりがきつくて黒人のようだ」といわれたリースの英語に矯正を迫った。本国の富裕層出身の同期生には無理のない英語も、彼女にとっては「自分を偽らせるよう圧力を加える壁」だった。矯正に努めたが、学校は改善の見込みは薄いと判断し故郷の父に見解を送った。

「養成学校での失敗を親族全員が知る故郷」に戻りたくなかったリースは、コーラスガールに転じる。20歳のとき、上流階級出身で「イートン－ケンブリッジ」卒の40歳の男性と恋に落ちる。彼はコーラスガールにしては教養と品があり、西インドの話をしてくれるリースに惹かれるが、身分違いを理由に結婚できないことを告げる。リースはコーラスガール仲間に身を寄せ、売春をするうち妊娠に気づく。危険な中絶手術を受けた後は、元恋人から「事務的な厚意」としての援助を受け続けたほか、ギャンブルに誘った男性から金を巻き上げるなど、「性と金とのこそこそした交

換」によって生きていく。

1917年、オランダ人ジャーナリストからのプロポーズが転機となる。イギリスでの滞在期間を超過していた彼は求婚するとすぐロンドンを発ってしまう。それでも、欧州を活動拠点とする婚約者との将来が、本国と絶縁する格好の理由になることがリースに決断させた。婚約者の身辺に不安があると警告する元恋人に心配は無用と言い残し、19年初頭、本国と決別する。家族史をさかのぼることでよみがえる「奴隷制の記憶」と、「二等市民」として冷遇を受けた本国経験は、『藻の海』に確かに刻印される。

「公式の目的」―クリオールからの異議申し立て

1964年リースは編集者への手紙に、『ジェイン・エア』を読むたびに苛立ちを覚えたと書き、とくに「狂人バーサ」について、異郷のイングランドに連れて行かれた彼女を「取り戻す権利が私にはある」と、『藻の海』に込めた自身の思いを綴っている。[18]

『ジェイン・エア』の後半で、隠していた妻の存在が知られてしまったロチェスターがジェインに過去を告白する。[19]妻との結婚は、次男であったロチェスターが莫大な遺産を引き継いだジャマイカのクリオール娘を得る目的で進められた。娘の媚びや嬌態に乗せられ結婚したが「すこしも彼女を愛さなかった」と言い、発狂した「忌まわしい母親の血を引いた娘」で「大酒のみの淫蕩な妻」に苦しめられたと訴える。母親同様、妻も発狂し絶望に駆られていると、「ヨーロッパから吹く希望の風」が、狂妻を連れ帰り監禁し、新しい縁を結ぶようにと勧めてくれたので、それに従ったと説明する。

ここには19世紀前半の本国イギリスから植民地へのまなざしが投影されている。1801年から5年間、総督の妻としてジャマイカに赴任したマライア・ニュージェントの日記には、彼女の目に映った白人プランター家族の旺盛な飲食行為や多数の黒人使用人に囲まれた生活が記される。[20]1834年のニュージェント死の直後に印刷された日記を、ブロンテが実際に目にしたのかはわからない。しかし、本国政府が、奴隷制廃止に強硬に反対する西インド植民地議会の主勢力であったプランター層を、「凶悪な専制政

治を支える近視眼的な人々」と非難していたのは確かである。[21] 当時 20 歳代終わりであったブロンテが、新聞報道や「ニュージェント日記」のような体験記をとおして、「西インドの白人」に否定的イメージを抱いていても不思議ではない。

『ジェイン・エア』のバーサ像に、クリオールを蔑む本国社会の認識を見て取ったリースは、ジャマイカでの少女時代のバーサが「狂気」に至るまでを『藻の海』に描いた。主人公アントワネット・バーサ・コズウェイは、クリオールの母と本国出身でプランターの父を持つ。アントワネットは奴隷制廃止直後の島で弟と育つが、父亡き後、元奴隷主の家族として、没落白人として、憎悪と軽蔑の視線に晒されながら暮らす。数年後母は再婚するが黒人たちからの報復を恐れていた。元奴隷たちによって屋敷を焼かれ弟が亡くなると、母は精神のバランスを失っていく。やがて義父も亡くなり、その直後、ロチェスター家の次男坊が、自分をのけ者にした父と兄を恨みながらイングランドからやって来る。多額の遺産を相続した世間知らずのクリオール娘アントワネットに求婚するためである。

当初は西インドと美しい妻にエキゾチックな魅力を感じたロチェスターだが、妻の「肌の色のちがう親族」による告げ口や脅迫めいた金品の要求を受けるうち、しだいに不信感と嫌悪感を抱くようになる。夫の変化を感じ取ったアントワネットは、元女中頭に媚薬の調合を依頼する。だがその秘策は、夫が混血の女中と関係を持つという結果を招く。この重要場面でアントワネットは、「黒人がお気に入りなのだと思っていたけれど、薄茶色の肌がお好みだったとはね」と言い、奴隷制の上に富を築いたプランター層を批判していた夫に「あなたの行為はかれらのしてきたこととどこが違うの」と問い詰める。夫はただ「奴隷制とは好き嫌いの問題でなく正義の問題だ」と返答するのが精いっぱいだった。[22]

ロチェスターの「婚外交渉」は『藻の海』の創作ではない。『ジェイン・エア』のなかのロチェスターもフランスで高級娼婦を囲った経験を持つ。自分の愚かさをジェインに告白する際、彼は「情婦を囲うこと」が「奴隷を買うことに次ぐ悪習」だとし、その理由を「情婦と奴隷」という「天性劣等なもの」と親しく暮らすことは「こちらが堕落していく」ことになるからだと説明する。[23] この場面をリースは見過ごさなかったのだろう。奴

隷主を批判する一方、「天性劣等なもの」には支配される理由があるとする、己の優越性を疑わぬ本国人の差別意識や浅薄な「正義」をリースは『藻の海』で再現してみせた。

バーサ（アントワネット）と西インドを否定し見知らぬ土地の片隅に監禁して自死に至らしめた、ヴィクトリア朝イングランドとイングランド人への復讐は完結した。では、アントワネット自身が悩まされる自己認識の動揺も、すべて遠い歴史的記憶から掘り起こされたものだったのだろうか。

止まったままの「ドミニカ時間」と西インド人のプライド

イギリスと絶縁し、オランダで結婚後つかの間の安定を得たリースだが、第1子を亡くし夫が逮捕されるなど不幸が襲う。しかし偶然に、かつて中絶手術後に苦しい日々を綴った日記が著名な編集者の手に渡ったことで、リースは作家として再起をはかり27年に本国に戻る。ロンドンの出版代理人レスリー・スミスと再婚したリースは、この後およそ10年間、順調に仕事をこなすが、相変わらずイギリスは心開ける場ではなかった。リースはこの頃、何を心の支えとしていたのだろうか。

本国復帰後初の長編である34年刊行の『暗闇の中の航海』には、主人公アンナのコーラスガール稼業や中絶手術の経験など、リースの個人史が投影されている。作中、アンナが「紳士の恋人」に自分の家系を明かす場面がある。「イギリスとイギリス人が嫌い」と公言するアンナは、亡き母方の所有する広大な農園、幼い頃見た奴隷名簿などを解説した後、「私は母方から数えて5代目の正真正銘の西インド人だ」と宣言する。[24]

一方、義母は、「白人の姿を見ないような場所」で育ち「黒人女中と判別がつかないようなしゃべり方をしていた」アンナを本国に連れ帰り、「ニガーではなくレディにしようと努力した」が不成功だったと語る。[25]『ジェイン・エア』に見た19世紀本国白人の熱帯植民地人に対する偏見と差別感情は、ヴィクトリア朝が終わっても弱まることはなかった。熱帯の風土、社会環境の差異などから、植民地に「あまりにも長く」滞在する入植者は「原住民」のようになるという「退化への恐怖」が、当の植民地

人よりむしろ本国の白人たちにとり憑いていた。[26] 本国にやって来た 17 歳の自分から自信と希望を失わせた「イギリス性」を、リースは義母に体現させる。「5 代目」だとアンナに宣言させることで、「西インド性」をその対抗軸として打ち出すのだ。

アンナの西インド人宣言の背景には、「止まったままのドミニカ時間」すなわち「繁栄のドミニカ」という歴史記憶がリースに残っていたからだろう。奴隷制廃止以降、ドミニカではムラートと呼ばれる混血人勢力が植民地議会に進出していった。しかしかれらの勢力拡大は、白人保守層と本国の干渉により、1865 年 3 月直轄植民地となることで阻止される。71 年にはドミニカ弁務官がアンティグア総督から任命されるという二重の支配構造に置かれた。新体制は多くの政治的・経済的混乱と非効率をもたらす。暴動とインフラ整備の遅れを無視できなくなった本国政府は本格的な開発に乗り出す。ヴィクトリア朝末期 1890 年生まれのリースの「ドミニカ時間」は、混乱収拾のために投入された莫大な助成金によって島の基盤施設が整備される時期でもある。主要道路の整備、電話線の敷設と郵便事業の開始、公共図書館建設などの大事業が 1905 年頃までに次々と実現する。首都ロゾーに暮らすリースは、最新のサーヴィスを享受し建造ラッシュを目にしたはずだ。

本国での屈辱と挫折は欧州でも癒されることはなかった。嫌悪する場に戻らざるを得なかったリースにとって、恵まれた境遇にあった少女期のドミニカと西インド人というプライドが、相変わらず冷淡な土地で「イギリス性」を物ともせず暮らしていくための盾となっていたことは間違いない。しかし、まもなく「ドミニカ時間」の針は一気に進んでしまう。1936 年２月の数週間にわたる帰郷が引き金となった。

「すべてが変わってしまった」故郷と「迷子のクリオール」

晩年のインタヴューで、リースは帰郷で見た西インドは「すべてが変わってしまっていた」と語り、「自叙伝には子どもの頃の西インドを書きたい」と繰り返し言う。[27] とはいえ、「変わってしまった」故郷の衝撃は漏らさずにはいられなかったようだ。リースの死で未完となった自叙伝で

は、子どもの頃のジュネーヴ農園の記憶を詳述した後、帰郷時に再度訪問したことに触れている。ガイドに導かれたその場所は「がらんとした更地だった」。「一生懸命に見つめた」が「いっさい何もなかった」。「屋敷の土台石までなくなっていた」。「屋敷が焼かれるのは、これが二度目か三度目だった」。[28] リースがわずかに漏らした「事件」はドミニカ現代史のなかにあった。

1920年代から30年代にかけて島は再び政治的混乱の時代を迎えていた。直轄植民地化によって勢力を抑えられていたムラートら中産階級が、公選議員による植民地議会の復活を強く要求するようになる。25年には4人の公選議員が誕生し、直轄植民地廃止運動は島全体に及んだ。危機を感じたドミニカ植民地行政府は任命議員の増員による少数派の排除を狙う。30年、新たに任命議員に推挙されたうちの一人にジュネーヴ農園当主ノーマン・ロックハートがいた。家系図からリースの母の弟つまり叔父だとわかる。彼が議員任命を受諾してまもなく農園と屋敷は放火され全焼した。ノーマンがどの程度行政府に親和的だったのかはわからない。しかし自治要求勢力からは、改革を阻む守旧派だと目され敵視されたことは間違いない。リース帰郷の36年には、新立法議会が発足し公選議員が議会の半数を占めるよう改革され、白人プランター層は弱体化していく。

放火事件はリースに二重の衝撃を与えたと考えられる。一つは、本国と本国人に対抗するための盾を失ったこと、もう一つは、「奴隷制の過去」からだけでなく、いまや「現在の故郷」からも自分が決して歓迎されない存在となったことである。『藻の海』の原型にあたる『幽霊』と題された小説は、帰郷から3年後の39年には完成していた。[29] しかし『ジェイン・エア』のバーサを描く以上、『藻の海』は1830年代の英領ジャマイカを背景にしなくてはならないことにリースは悩んでいた。[30] 『藻の海』には、黒人からも混血からも憎まれ軽蔑される白人プランター層の様子が克明に描かれる。実際に、1834年の奴隷制廃止から直轄植民地化までの30年間、「英領西インドで唯一白人支配の弱体化に成功した島」であり、ムラートと白人が政治的にも拮抗していた。ただし、これはジャマイカでなくドミニカの歴史であり、前述のように1920年代半ばからのドミニカも似た状況だった。だとすれば、リースが『ジェイン・エア』の枠組みに、遭遇し

た故郷の政治・社会構造を組み込んだ可能性があると考えられないだろうか。

『藻の海』で、島の黒人から「白いゴキブリ」、本国人から「白い土人」と呼ばれるアントワネットは、「私はいったい何者なのか」と自問する。[31]「父はウェールズ人、母方の曽祖父はスコットランド人」で、「わかっている範囲で私は白人だが、母国というものはすでにない」。[32] リースが 59 年に編集者へ送った回答は、アントワネットへの回答でもある。『藻の海』を仕上げている頃、リースは西インド人ではなくなっていた。

『藻の海』第二部でアントワネットは失くしものをする。混血の女中と関係した夫に、「あなたは大好きなこの場所を憎むべき場所にしてしまった」と責める。「たとえ何もかもが私から無くなってしまっても、まだここがあると思っていたのに」。[33] ジュネーヴ農園を失い、改革を阻む一族の一人と見なされるリースにも、「ここ」はすでに失くした場所だった。第三部のアントワネットは「屋根裏部屋の狂人バーサ」である。彼女は周囲がどう言おうとイングランドにいるとは思っていない。「イングランドに行く途中で迷子になったのだ」。[34] 迷子になったクリオール。それは長い奴隷制の歴史を経て、なお続いてきた植民地支配の「終わりの始まり」を目の当たりにしてしまったリースにしか描きようのない、帰郷の場を失い存在の拠り所を断ち切られた、リース自身の姿だった。

19 世紀の歴史枠組みを生かしつつ、変わり行く故郷から受けた衝撃をリースが作品にどう反映させたかが明らかになった。クリオールという存在が、ヴィクトリア朝の「遺産」の一つであることを巧みに描いたリースだが、クリオール以前に、存在の拠り所を断ち切られていた「かれら」奴隷の子孫たちの、脱植民地過程における営みを語る言葉は持たなかった。その「迷子のクリオール」の語りの余白に、これから更にどのような事実を見、それをどう共有していくか。クリオール作家ジーン・リースが受けた脱植民地化の衝撃は、ヴィクトリア朝の「遺産」を再認識させ、その「清算」への議論を促す材料でもある。

（本稿は、日本ヴィクトリア朝文化研究学会第 11 回大会で報告した内容に加筆・修正を施したものである。）

注

1. 本橋哲也『ポストコロニアリズム』（岩波新書）、岩波書店、2005 年、xiii 頁。
2. 次のシリーズはその代表的研究の一つである。Mackenzie, J.(ed.), series *Studies in Imperialism*, Manchester Univ. Press, since 1984.
3. Rush, A. S., *Bonds of Empire: West Indians and Britishness from Victoria to Decolonization*, Oxford Univ. Press, 2011.
4. P・ヒューム（岩尾・正木・本橋訳）『征服の修辞学』、法政大学出版局、1995 年。
5. 本稿では次のテクストを使用した。Brontë, C. (introduction & notes by Davies, S.), *Jane Eyre*, Penguin Classics, Penguin Books, 2006、C・ブロンテ（遠藤寿子訳）『ジェイン・エア』上・下、岩波書店、1957 年。
6. 本稿では次のテクストを使用した。Rhys, J., *Wide Sargasso Sea*, Penguin Books (first published by André Deutsch, 1966), 1984.
7. Stoneman, P., *Brontë Transformations: Cultural Dissemination of 'Jane Eyre' and 'Wuthering Heights'*, Prentice Hall, 1996.
8. Parey, A., 'Jane Eyre, Past and Present', *Revue LISA/LISA e-journal*, Vol. IV, No4, 2006, pp.1–8.
9. Angier, C., *Jean Rhys: Life and Work*, Little, Brown and Company, 1990. なお、本稿で扱うリースの生涯に関する記述はこの資料から引用・参照した。
10. James, S., *The Ladies and the Mammies: Jane Austen & Jean Rhys*, Falling Wall Press, 1983.
11. O'Callaghan, E., 'Keynote Address for the Jean Rhys Conference and Festival, Dominica', June 10–13, 2004, p.8. http://www.cavehill.uwi.edu/bnccde/dominica/conference/rhys/ocallaghan.htm
12. Brathwaite, E. K., *Contradictory Omens*, Savacou Working Paper Reprint 1, Mona, Jamaica, 1982, p.36.
13. Savory, E., *Jean Rhys*, Cambridge Univ. Press, 1998, pp.222–223.
14. 本稿では、英領西インド植民地における奴隷制廃止以前に入植したイギリス系白人の子孫を、フランス系白人と区別するうえで、「クリオール」と表記する。
15. ドミニカ島の歴史に関しては次の資料を引用・参照した。Honychurch, L., *The Dominica Story: A History of the Island*, Macmillan, 1995 (first edition 1975).
16. Angier, *op. cit.*, pp.13–14.
17. Rhys, J., *Smile Please: An Unfinished Autobiography*, Penguin Books (first published by André Deutsch, 1979), 1981, pp.104–105.

18. Rhys, J. (selected by Wyndham. F & Melly, D.), *Letters 1931–1966*, Penguin Books, 1984, pp.270–271.
19. Brontë, *op*., *cit*., pp.351–357、ブロンテ前掲書、下、126–138 頁。
20. Cundall, F. (ed.), *Lady Nugent's Journal: Jamaica One Hundred Years Ago*, Cambridge Univ. Press, 2010, p.78, p.80.
21. E・ウィリアムズ（川北稔訳）『コロンブスからカストロまで』Ⅰ・Ⅱ、岩波書店、1978 年、Ⅱ、55, 150–151 頁。
22. Rhys, *Wide Sargasso Sea*, pp.120–121.
23. Brontë, *op*., *cit*., pp.358–359、ブロンテ前掲書、下、138–139 頁。
24. Rhys, J., *Voyage in the Dark*, Penguin Books (first published by Constable, 1934), 2000, pp.45–47.
25. *Ibid*., pp.56–57.
26. A・ストーラー（永渕・水谷・吉田訳）『肉体の知識と帝国の権力』、以文社、2010 年、83–84 頁。
27. Vreeland, E., 'Jean Rhys──The Art of Fiction LXIV', in *Paris Review*, Fall, 1979, p.228.
28. Rhys, *Smile Please*, pp.37–38.
29. Rhys, *Letters 1931–1966*, p.213.
30. *Ibid*., p.214.
31. Rhys, *Wide Sargasso Sea*, p.85.
32. Rhys, *Letters 1931–1966*, p. 172.
33. Rhys, *Wide Sargasso Sea*, p.121.
34. *Ibid*., p.148.